



風疹とは、風疹ウイルスを原因とし、**発熱・発疹・リンパ節の腫れ**を主症状とする感染症です。風疹ウイルスの感染経路は、風疹ウイルスに感染した患者さんの咳や鼻水などを介する飛沫感染で、ヒトからヒトへ感染が伝播します。

潜伏期間 風疹ウイルスが体内に侵入してから、症状がでるまでの潜伏期間は2～3週間です。

初期症状 倦怠感や微熱、首のリンパ節の腫れなどが現れます。特に首の後ろや後頭部が腫れることが特徴的です。リンパ節の腫れが引くには数週間程度かかります。

発疹症状 初期症状が現れて3～7日前後が経過すると発疹がみられます。発疹は顔から全身へと広がります。別名「三日はしか」と呼ばれることから示唆されるように、発疹は数日ほどでおさまり、跡を残すこともほとんどないと言われます。発疹の現れる数日前から発疹出現後1週間が、感染力の強い期間です。ですが、15～30%程度は感染しても明らかな症状が出ない不顕性感染をしている方がいると言われていています。この不顕性感染は本人自体には症状が現れないので、気づかないうちに人にうつす可能性はあるので注意が必要です。

風疹の合併症 血小板減少性紫斑病（1/3000～5000人）、急性脳炎（1/4000～6000人）などの合併症をみることもありますが、これらの予後もほとんど良好です。成人では、手指のこわばりや痛みを訴えることも多く、関節炎を伴うこともありますが、ほとんどは一過性です。

風疹でもっとも重大な問題は、妊娠初期に風疹ウイルスに感染することによって、おなかの赤ちゃんに起こる悪影響です。それは先天性風疹

症候群と呼ばれ、難聴、心疾患、白内障、緑内障、網膜症、低出生体重、精神・運動発達の遅れ、発育の遅れ、血小板減少性紫斑病、肝脾腫、などが現れます。

先天性風疹症候群を発症する可能性は妊娠の早い時期ほど確率が高くなります。妊娠1ヶ月で50%以上、2ヶ月で35%、3ヶ月で18%、4ヶ月で8%程度とされています。一方、20週間目以降に風疹にかかった場合は、障害が残ることはほぼありません。

予防接種の必要性 このように風疹は、妊娠がはっきりしていない妊娠初期から胎児への影響が出るため、先天性風疹症候群を防ぐには、男性を含めて多くの方が予防接種を受けて風疹に罹らない→うつさないという形を作っていく必要があります。妊娠中はワクチン接種を受けることができないため、女性は妊娠前に2回予防接種を受けておきましょう。

風疹を含むワクチンの定期接種制度は移り変わりががあります。そのため、生年月日によって予防接種の接種機会が異なります。具体的な生年月日による違いは次のようになっています。

- | | |
|--------------------------|---------------------------------|
| ・1962年4月1日以前生まれ | …接種なし |
| ・1962年4月2日～1979年4月1日生まれ | …男性は接種なし、
女性は中学生のときに集団接種（1回） |
| ・1979年4月2日～1987年10月1日生まれ | …男女ともに中学生のときに個別接種（1回） |
| ・1987年10月2日～1990年4月1日生まれ | …男女ともに幼児期に個別接種（1回） |
| ・1990年4月2日以降生まれ | …男女ともに個別接種（2回） |

風疹の予防接種2回接種されていない人、風疹にかかったかどうかわからないひとは、風疹の免疫が十分でなく風疹に罹患する恐れがあります。自分、家族、友達を守るためにも、風疹の予防接種を受けることをお勧めします。（免疫があるかどうか知りたい方は、採血による抗体チェックもできます。）